

保 存 修 景 計 画

— 歴史的文化遗产保存の構想 —

西 川 幸 治

一、現状と保存修景計画

現在、人類のもつ文化遺産・歴史的景観は大きい危機に直面しており、その保存・保全と開発をめぐる問題が鋭く提起されている。^①たとえば、世界でも遺跡の分布密度のもっとも高いといわれるわが国の遺跡保存をみると、開発事業の増大にもなつて、遺跡の調査数は昭和三十年ごろ約二五〇件、同三十五年には約三五〇件、最近ではおよそ五〇〇件に達し、未調査のまま記録されることなく消滅してしまつた遺跡の数はこの二〜三倍にも達するといわれる。ところがこうした事態は直接開発事業に当面する遺跡にかぎられ、他の美術品その他の文化財が安全であるかといえばそうではない。最近報道された文化財流出事件をみれば、一般の

信頼により、信託されてきたこれら文化財の所有者が、文化財を単なる財宝としてしか意識せず、その管理に対する矜持と責任を喪失してしまつていることをしらされるし、また見学拝観者らによる文化財のあいつぐ破損事故は、文化財を国民共有の文化遺産として守っていく自覚の欠如を示しているといえよう。なお、文化財の指定対象とはなつていないが、史料として歴史的価値の高い古文書・古記録、町村合併や村落の共同体の解体で、その所在が不明になりやすい地方史料、最近保存の規制が解かれたという明治壬申戸籍など、その記録・保存・利用の方法に根本的検討が要請されていることも忘れてはならない。^②

ところで、こうした現状はなにに由来するのであろうか。それはいうまでもなく、生産技術の急速な革新とそれともなう経済

の成長が、開発と再開発によって世界各地の地域社会と都市の構造を、前代未聞のスケールと深刻さをもって大きく改造させ、その変容をせまりつつあるからにはかならない。この未曾有の建設工事にともなう開発と保存・保全の問題は、とすれば相矛盾し、相対立した概念として扱えられがちである。しかし、両者は人類の歴史が示してきた、生産のたえざる発展と生活環境の向上という共通の目標と願望の上になつて有機的にとりあげられ、解決されるべきである。したがって、この激動する新しい事態に適確に対応する保存・保全の対策をうちだすべきであり、そこにいささかの遅滞も齟齬も許されない。

しかしながら、文化財保存の現況をみると、歴史的な文化遺産が史跡や文化財として指定をうけるのみで、その地域社会とまったく遊離したまま、いたずらに放置されている場合が多い。反面、本来直接に利をうみだすものではない文化財が安易な「観光」開発の対象となり、文化遺産がその歴史的価値や美的価値を損傷されていることも無視できない。また、たとえ文化財が完全に保存されたとしても、従来のように遺構・遺跡がたんに孤立した点として保存されたのでは、はげしく変貌する周辺の環境から遊離し、断絶してしまう傾向が、よく、文化遺産をめぐる広域な環境の保全・整備もつよく要請されている。

そこで、現在の時点で文化財として意義あらしめるべく、文化遺産を調査して再評価し、現在のすぐれた保存技術を適用して整備し、さらに文化遺産をめぐる歴史的景観もあわせ保存し、これらをもつ歴史的対象と文化遺産そのものをもつ価値を実感をもつて追体験できる場として位置づけ、文化遺産とその環境を、大きく変貌し変容をとげつつある地域社会や都市生活のなかに定着させるための保存修景計画が必要である。

つぎに保存修景計画が現在の地域計画・都市計画と分ちがたく関連してもつ機能についてみてみよう。現在広汎に進行しつつある都市化の現象のなかで、明るい太陽と緑そして清澄な空気を求める住民を失望させる生活環境のいちじるしい悪化がみられる。

この計画は緑地を確保し、居住環境を整備し、健康な居住空間を構成する計画の一翼ともなり、また、近い将来に予想される余暇時間の増大に対応して、市民の健康なレクリエーション空間・教育的観光の場として、未来の生活空間を設定するための重要な要素ともなろう。

次に保存修景計画の事例的考察として、京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊の調査地の一つであり、「発展しつつある地点」として、その仏教期遺跡の保存が大きく問題とな

っているアフガニスタンのジュララバードと、わが国のもっともすぐれた歴史的都市として、最近その開発と保存をめぐる論議が活潑な京都をとりあげてみたい。

二、事例的考察

I ナガラハラ保存計画

那掲羅烏(ナガラハラ)国は、五世紀の法顯、七世紀の玄奘いらい、燃燈仏や仏影窟のある仏教の靈地としてよく知られていた。このナガラハラはアフガニスタンの東南、首都カブルからカイバル峠へむかう道路にそい、東流するカブル河を北にした町、ジュララバードの附近に比定されている^③。

玄奘が訪れた当時、この地方は「穀稼は豊かにして華果多し」といわれた豊沃な地であったが、そのご荒廃し、とくに鹽羅城に比定されるヘンダは荒廢たる隙地と化してしまった。ところが近年、この荒廢したジュララバード盆地にも道路建設・土地改良の工事が国際的協力のもとに積極的におすすめられ、はげしい変貌をとげようとしている。すなわち、カブルからカイバル峠への道路が舗装工事で整備され、首都カブルとの時間的距離が短縮し、またこれにともなって開発と周辺の都市化がすすんでいる。土地改良の工事はカブル河がジュララバード盆地にはいる峡谷のダ

ルンタにダムを建設

し、その灌漑による

耕地化が、その名も

ゆかしいナンガルハ

ル・プロジェクトの

もとにすすめられ、

従来六、七三〇ヘク

タールしかなかった

耕地の三〇、四五〇

ヘクタールの増加と、

農作物の約八倍の増

収がみこまれている。

また、このダムの水

力発電は、都市に電

気とこの地域に工業

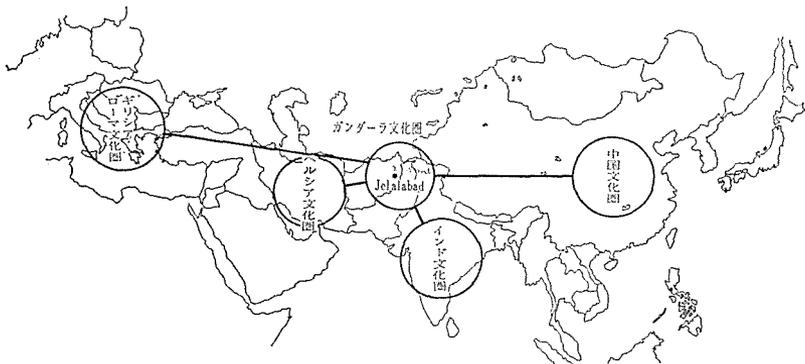
電力を供給している^④。

こうして、ジュララ

バード一帯は開発と

自然改造の事業によ

って、かつての面影



I ガンダーラ文化圏とジュララバード(ナガラハラ)

を復活させ、その面目を一新させようとしている。

このジェラバード地方は、バーミヤン、ベグラム、バルクなどとならんで仏教遺跡が多く、東西文化の交流をものがたるアフガニスタンの仏教文化の二中心をなしている。この地方の調査は一九世紀にイギリスのC・マッソン^⑤やW・シンプソン^⑥によってはじめられた。今世紀になってフランス考古学調査団のA・フーシエ、A・ゴダール、J・バルトウらによってハッダの発掘がおこなわれ、その出土遺物が世界各地の博物館にあらわれ、「ハッダの塑像」として多くの人に知られてきた。

これらの調査研究をひきついで、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊は国立カーブル博物館と合同して一九六二年八月から九月にかけてカーブル河左岸にあるフィルハナ石窟寺院を実測し、丘上の仏塔を中心に、河岸の断崖に掘鑿された石窟群——アフガニスタンでは他に類のないインド的なヴィハラ窟、アフガニスタンに特有なトンネルでつながってならぶバザールをおもわせる石窟列、そのほか多数の単独窟——からなる寺院の構成を明らかにした。^⑦一九六六年には十二月から翌一月にかけて、ハッダに近いラルマ村の仏教寺院址を発掘し、方八メートルの中心大塔とそのまわりの多数の奉獻小塔、またこれらに伴出した多数の塑像片を発見した。また、この発掘調査と併行して

ジェラバードの盆地をめぐる周辺一般調査を行なった。

これらの調査を総括すると、ジェラバードの町に近接して西に拡がるナガラハラ都城址と推定される広大なテベと二、三の塔址をのぞいて、仏教遺跡はジェラバード盆地をめぐる山麓や盆地を貫流する川に面した台地にあり、ナガラハラ都城をとりめぐる形をなしている。(図Ⅱ参照)これらの寺院址は塔を中心僧房と石窟群とからなっている。しかし、東の山麓にならぶ四つの塔址をのぞき、まったく崩壊し、そのおもかげを残すものはすくない。C・マッソンとM・ホーニヒベルケルが発掘し、^⑧現在、大英博物館が所蔵する黄金の舍利容器で有名になったビーマラン第二塔も、塔身の一部をのぞいて、まったく崩壊しきっている。

これらの遺跡の崩壊した状態をみると、その破壊にはつぎのような諸要因が考えられる。

①自然力による破壊 仏教がすたれ、寺院の維持管理が困難になると、風雨や地震などの自然力で大きく破損されていった。^⑨とくに塔頂の相輪を支える鉄柱が落雷をよび、塔の破壊を促進したとフーシエは考えている。^⑩最近では、カーブルの郊外にあった仏教期の幡柱スルフ・ムナレが一九六五年春の地震で崩れさり、まったくその痕跡すらとどめなくなつたが、これもこの

類に属する破壊といえよう。

②戦乱や侵入による破壊 たとえば六世紀はじめ、仏教を信じない異教徒、エフタル王の侵入によって、ガンダーラの仏教と美術は壊滅的打撃をうけた。タキシラのダルマラージカ僧院址の発掘では、その状況が如実に示されていたといわれる。③次項でのべるパーミヤン石仏の脚部は一九世紀ナデルンジャやアウレゼブの軍隊の砲撃の的になって破壊されたといわれるが、これもこの類に属する破壊といえよう。

③異教徒の定住による破壊 偶像破壊の習慣をもつイスラム教徒がここに住みついたことは仏教寺院に大きな破壊をもたらした。顔は口と顎を残してけずられ、腕は前脚からもぎとられたパーミヤンの二大石仏はこのことを明らかに示している。ハツダの調査でもこの種の破壊がみられたという。

④不用意な調査による破壊 ジェラバード盆地の仏塔は、そのほとんどが塔身に大きな穴があがうがたれている。これは調査にあたって仏教寺院を理解しなかったC・マッソンらが古銭にのみ強い関心をもち、塔身の舍利室をめざしてあけたもので、これが先例となり破壊が進んだ点も無視できない。またフランス考古学調査団によるハツダの遺跡も調査後の保存が充分でなく、まったくの廃墟として残っているにすぎず、遺跡と調査報告を

対照するものも困難なくらいである。これでは「収奪的調査」と非難されても止むを得ない。これに対して最近、フランス考古学調査団でもスルフ・コタルの発掘ではかなりの保存の対策がはらわれ、またイタリアの中東極東調査団 (IEMEO) はパキスタンのスワト地方で、調査と保存工作进行を併行してすすめており注目される。今後の調査には調査報告書を刊行するとともに、保存管理の対策をたてることも必須であるといえよう。

⑤乱掘による破壊 前にものべたように近年改修された道路は首都カーブルとの時間的距離をせばめ、ハツダの美術を愛好する観光客は素朴な村人を刺戟し、白昼堂々と乱掘がすすめられている。これは停滞的ともいふべき村落にすぎなかったこの地方に、急激な開発がもたらした現象といえるが、現在これに対する管理規制も充分でなく放置され、憂慮すべき状態におかれている。④

ここで④自然力による破壊については、現在ユネスコの援助のもとにすすめられているグルダラ塔の保存工作^⑥のように、調査——記録——保存工作をさらに強化していくことにより解決されるであろう。

⑥戦乱・侵入による破壊については、政治外交の分野で解決されるべきことであり、ここでは問題にできない。

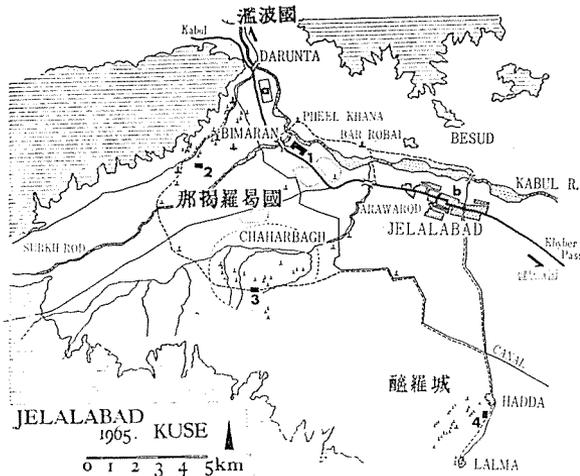
③異教徒の定住による破壊はフランスの強力な援助のもとに設立されたという国立カーブル博物館がその大半を仏教に関連する遺物の展示にあてていることから知られるように、偶像破壊の習慣もかつてほどでなく、寛容なる態度を示しつつあるのでさして問題にならない。

現在、もっとも問題になるのは④不用意な調査による破壊と⑤乱掘による破壊という、人為的破壊というべきものである。そこでこの点について、その対策を考えてみたい。まず乱掘についてみると、この地方の遺物が単なる美術品「ハツダの塑像」としてのみ関心をもたれ、愛好されることは、その結果、乱掘により遺物を遺構から遊離させてしまい、ガンダーラ美術の研究をいぢるしく困難にしている。もしこのような状況が規制されることなくつづけば、やがて研究自体が不能なることを深く認識しなければならぬ。

この研究上の危機を克服するためには、遺跡の調査と管理方式を再検討し、根本的な対策をたてなければならぬ。すなわち前にもふれたように、乱掘や計画性をまたぬ非学術的調査を厳禁し、遺跡の発掘調査と保存工作を併行してすすめる総合的調査を原則とし、遺跡の保存管理を嚴重に規制しなければならない。また現在、遺跡や遺物に対する地元住民の理解をうるための教育・啓蒙

的活動は殆んどなされていない。しかし、この地方の地域社会からこれら文化遺産が遊離しがちな現状を深く考慮して、たとえば遺跡に近接して遺跡調査管理室を設け、遺跡の現地説明・管理および出土遺物を公開することにする。そしてこれら文化遺産もつ東西文化交流史上にしめる意義を明らかにし、かかる輝しい文化を創出した風土環境を追想し、創造した人間の努力に対する敬意を深めたい。こうした共通の認識と教育啓蒙の活動によって、これら文化遺産を地域社会に定着させ、文化財に対する再評価と再認識を通して、現在イスラム教徒であるという宗教的立場の故に冷淡な無関心な態度を示している住民も、調査活動に積極的に協力、参加し、ついには住民みずからこの活動を推進できるような努力をつづけてはならない。

以上を基本的態度として、現段階における具体的な保存計画の構想を次に示してみたい。先にも述べたように、「ハツダの塑像」をふくむガンダーラ美術が単なる美術品として関心をもたれ、愛好される結果、調査研究活動を著しく困難にしている。そこで、このガンダーラ美術が仏教文化の源流を探索しようとするわれわれ東方人をひきつける強い関心と、ヨーロッパ文化の母胎であるギリシア・ローマ文化の東方への影響をたどろうとする西方の人



II ナガラハラ保存計画1966

1. ナガラハラ博物館・ナガラハラ仏教文化研究所・宿泊施設
 2. ビーマラン遺跡調査管理室
 3. チャハルバグ遺跡調査管理室
 4. ハッダ遺跡調査管理室
 - a. ソン運技術者集落
 - b. 王立植物園
- 上 仏塔址 横線 海拔 750 m以上

の強い意欲の上になつて、地元の研究者を中核とし、東と西の国際的協力による遺跡の組織的調査と維持管理を考へてみたい。

まず、カーブルからカイバル峠へぬける道路はアジア・ハイウェイの一環として、今後さらに整備され、ここをめぐる東西交通はいつそうはげしくなり、また近い将来に予想される余暇時間の増大は、このナガラハラへさらにつよく多くの人々をひきつける

であらう。そこでまず、ジュララバードに近いカーブル河とスルフアブ河の合流点に近く、ナガラハラ都城址に接し、カーブル河をへだてて対岸の雄大なフィールハナ石窟群を望む地点にナガラハラ博物館とナガラハラ仏教文化研究所および研究者用宿泊施設を設ける。ナガラハラ博物館はジュララバード地域の出土遺物を収蔵・展示して、見学者・観光客に公開し、理解を深める場とするとともに、遺跡と遺物の保存管理・運営をはかることにする。ナガラハラ仏教文化研究所は仏教文化と東西文化交渉に関する国際的協力による研究機関として、各国研究者による研究の交流をはかるとともに遺跡の発掘調査を統轄管理することにした。研究者用宿泊施設は長期および短期の滞在研究者の利用にあてる。また、ハッダ・ラルマ・チャハルバグ・ビーマランなどには遺跡の調査管理室を設け、遺跡の現地における調査と管理にあてることもっとも望ましい。そして、これらの遺跡を結び、幹線道路に接続する環状道路をその一部は灌漑水路と平行させて整備し、見学旅行者・研究者の遺跡への接近を容易にしたい。

また、各遺跡の発掘調査はナガラハラ博物館の統轄管理のもとに組織的にすすめて、調査で明らかになつた各寺院址の中心である塔をはじめ僧房・石窟群の保存整備の工作も併行して行ない、発掘によって、自然的条件のもとにさらされ日干レンガや石積の構

造が崩壊するのを防止する。また数多い遺跡の一部には確実な資料をもとにして可能なかぎり復原工作をほどし、一般の見学者の理解をたすけるようにする。さらに、仏教寺院址群の調査と併行して、これらの寺院群を支えてきた都市・ナガラハラ都城址の発掘調査も計画的にすすめたい。ナガラハラの仏教寺院址が建築・美術の面ですぐれた東西文化の交流の結実を示すのに対し、このナガラハラの都市遺跡の調査では、その都市生活の面でもいかに深く東西の文化が影響をあたえていたかを明らかにすることができらるであらう。

なお、現在もつとも問題となっている遺物に関しては、アフガニスタンの国立カーブル博物館、ナガラハラ博物館および調査に参加した内外の研究機関に一定の比率で分散管理することにするが、これらは単に固定するのではなく、流動循環させることも考えたい。すなわち、ナガラハラ博物館および各遺跡の調査管理室では、遺跡と伴出遺物を現地で一貫して研究見学できるように配慮するが、同時に遺物の比較対照研究のための移動と交流も考慮したい。そのためには、遺物の移動交流に関する管理運営の機関が必要である。国内的には中央のカーブル国立博物館が地方博物館間の交流を管理することにし、国際的にはユネスコのような国際機関が遺物の管理と交流に関する正確な情報を集中、把握し、

これにもとづいて、この国際機関に属する専用の航空機・船舶などの安全な輸送手段によって円滑な遺物の国際交流を促進し、比較研究・比較観賞の機会を与えることにしたい。この物としての遺物・文化財の移動循環と研究者・見学旅行者の交流を適確に重ね合せて新しい時代の動きと要請に対応させていきたい。

こうした研究体制と保存体制のもとに、現在は数少ないが、やがて養成され成長してくる現地の研究者を中心に、東西の研究者がそれぞれ個有な研究目標をもって、東西文化交流の所産ともいふべきナガラハラの建築遺構と美術を調査研究し、その研究成果の交流と普及をはかることは、多様な文化の共存とその調和による人類の発展がよよく要望されている現在、われわれに多くの教訓を与えるものとおもう。

II 環京都緑地帯構想

京都はわが国のもっともすぐれた歴史的都市であり、かつ多数の文化遺産をもつ都市として、その開発と保存をめぐる問題が鋭く提起されている。すでに、この問題をめぐって多くの提案がなされ、解決への努力がつけられている。^⑩

この構想は、平安奠都以来たゆみなき都市的發展をとげてきた歴史のなかに、現在の京都を位置づけ、その歴史的経験をふまえ

て、京都の将来像を描こうとするものである。そこで、まず京都の都市的發展を概述してみたい。京都の歴史は平安京にはじまる。平安京は中國の都城制を規範として計畫されたが、その規模は唐の長安の約四分の一、その四周にめぐらされた羅城は大陸に比べ、その規模は著しく小さく、そしてよわかった。この律令國家の中心である都城の中核は宮城であり、東・西の両市が官制の市として設けられ、律令体制下の流通機構の中心として、民衆の交会する場ともなっていた。このように、平安京は宮城を象徴的・格式的核とし、東・西両市を機能的・經濟的核とする複合的都市核の構成を示していた。やがて、律令体制の衰退とともに東・西両市は解体し、あらたに室町と西洞院の間の南北路（現在の新町通）に、「町」が成立し、ここに町座が線状に集中して流通機構を構成し、莊園領主の在所に変質した京都の經濟的機能の中核となった。応仁・文明の乱前後になると、畿内を中心として各地に、多様な環濠城塞都市が生まれた。一向門徒衆による寺内町では、圧迫する世俗の権力に対して、「仏法の為に一命を惜しむべからず、合戦すべき」（帖外御文章一九文明五年）気構えを示し、対外貿易都市として栄え、京都・奈良にならぶ独自の文化を形成しつつあった堺では、濠をめぐらして防禦し、会合衆三十六人によって、北庄の經堂が「地下之公界会厭」^①（庶軒日録文明一八年）にあてられ、ベニス

市のように運営されていたという。また村落では惣的結合を示す垣内集落も生まれた。京都でも戦乱のさなかに、町衆の間でみずから「ちようのかこい」をつくり、自衛する気運がうまれた。ここに共通するのは地域社会・都市を運命的共同体として自覚し、自衛するための防禦体制がとられたことである。こうした動きは、京都を大きく変貌させてきた。すなわち市民の間にその生活全般の安全を確保するため、相たすける集団生活の基本単位としての町が成立した。この町はもちろん条坊制の町とは異なり、また、これまでの商業地域を意味する町にたいして、市街地で地域的に協力しやすく、火急の際にも便利な、道路の両側をもって一町を構成する生活組織を表現するものであった。天文の初年には、この町の地域的結合体である町組の成立をみた。②一方、各地で戦国大名が築市を宣言し、自由商業の場を設け、変容する郷村に対して積極的な態度を示し、城郭と城下が一体化する動きがみられた。信長や秀吉らは、こうした新しい都市の動きを吸収し固定して、安土をはじめ各地に近世城下町を建設した。秀吉はいいつく戦乱で荒廢した京都の復興に着手し、聚落第をつくり、これを中核に近世城下町化をはかった。まず天正十八年（一五九〇）、町割を整理し、寺町―高倉間、堀川以西・押小路以南の地域には半町ごとに南北の路をつけ、短冊型の地割とし、市内に散在した寺院

を東京極及び北の安居院附近にあつめ、寺町・寺の内と称した。さらに、天正十九年（一九五二）には、四周に御土居をめぐらし洛中と洛外を画し、洛外との交通は俗に京の七口といわれる七ヶ所の通路にかぎった。これは平安京創設いらいはじめて完成した羅城で、いわば京都の環濠城塞都市化ともいえるが秀次事件による聚落第の破却とともに、無用なものとなり、京都の近世城下町化は失敗に終わったといえる。

慶長八年（一六〇三）の江戸開府により、京都は政治的中心としての地位を失ない、京都所司代の管するところとなり、伝統的格式の核としての禁裏御所と、これに対する現実の政治的權威を示す核としての二条城とを象徴的複合核とし、蓄積された文化的伝統を継承すると同時に、積極的な開発もすすめられた。慶長十六年（一六一二）、角倉了以によってお土居の東、鴨川との間に伏見に達する高瀬川が開鑿され、京都の経済的動脈となり、秀吉がひらいた伏見や室町・烏丸とならんで近世京都の流通機構の中心となった。お土居をこえて東への発展は、知恩院の改築、大仏再建などにみられ、享保年間には二条から松原までのお土居が撤去された。こうした近世京都の発展と繁栄を支えたのは、西陣機業であり、その他の諸工芸であった。しかし、享保ころになると各地で機織が盛行し西陣の独占的地位はくずれたが、ちょうどその

ころから、名所・旧蹟見物の流行がおこり、花洛名所図会、都名所図会、京羽二重、などの名所案内書の刊行はこの傾向をさらに促がし、今日いうところのレクリエーション空間としての価値をもつようになった。こうして江戸が全国の政治的中心となり大坂が商業的中心となったのに対し京都は文化・観光面における中心的地位をしめることになった。

ところで現在、京都が当面する事態に対してとりわけ参考になるのは、明治の変革にともなう京都の対処であろう。明治二年（一八六九）東京への遷都は決定的な事実となった。明治新政府の確立によって京都は千年にわたる帝都たる地位を失ない、いわば廢都ともいうべき事態となり、京都はここに大きい試練に直面することになった。明治以降の京都の歴史は、この危機の克服の歴史であり、また京都の独自の近代化への歩みともいえるよう。

東京遷都の断行によって京都市民は狼狽と落胆、深刻な絶望におちいったが、やがてながい間つちかかってきた町衆の力と自覚のもとに、積極的にして、且つ適確な対策を講じた。それは主として京都府大参事榎村正直らによって、政治・経済から学校・風俗にいたるまでの大改革が推進された。その積極政策を、『勸業事務』（明治七年及び十二年）附載の「起業進歩」と題する事業報告の項目についてみると、舎密局・織殿をはじめ各種の産業

施設のほかに集書院博覧会、女紅場などの文化施設が含まれていることも注目され、各産業施設には技術の教育・研究・研修の機能も含まれていた。新しい産業計画とともに、古くから学問・文化の中心としての位置を占めてきた京都では、明治二年（一八六九）、小学校が各町組ごとに設立され、地域的な学区制が町組の組織の上に布かれ、小学校が地域社会の中心としての役割を果すようになった。この学区制は全国に先がけて、その模範を示したものであり、さらに中学校、女学校、及び外国語学校も開設された。ここで注目すべきことは、産業の近代化の努力が欧米の先進技術のたんなる導入による工業開発にとどまらず、その伝習を広範な教育、文化的施策にまで及ぼし、はば広い基盤の上になつて文明開化をうけ入れ、発展させ、古い京都を新しく復活させようとしたことである。こうして京都は明治初年の危機をその独自の方式で克服し、新時代へ対応する姿勢を示した。すでに明治七年（一八七四）ころの東京新聞は、「御東遷後は忽ち衰微に至ると衆庶の思ひしよりは、却て意外の繁華を起せし事多し」と伝えている。

その後も京都は着実な近代化の歩みをつづけた。しかし、それは必ずしも安穩な途ではなかった。まず原料がなく、輸送も不便であった。これを解決する手段が疏水計画であった。それは疏水

を通して琵琶湖と京都を結び、さらに大阪と結ぶ輸送路と輸送力を確保することであった。疏水開鑿の事業は江戸時代にも寛政・天保・文久年間にその計画があり、明治五年（一八七二）にも計画されたが実現をみなかった。明治十五年（一八八二）、京都府知事北垣国道によって実行に移され、工事は有能な青年土木技師田辺朔郎によって、多くの困難を克服し、六年の日時をついやして、明治二十三年（一八九〇）に完成した。この疏水計画は貨物の輸送、洛北の灌漑、西陣への水力の供給、そのほか防火・市内河川の浄化という多目的をもつもので地域総合開発計画の先駆をなすものであった。当初の計画では白川から一乗寺にいたる東山一帯の疏水に水車を設け、その機械的動力を機業その他の技術革新に利用しようとするもので、これが完成をみていたならば、今日の住宅地は零細な工業地帯になっていたであろう。ところがアメリカでの水力発電の成功を知った田辺技師は急いで計画を変更し、水力利用の発電方式にきり替えることを決定した。明治二十四年（一八九一）には蹴上発電所が開かれて、西陣はじめ市内に点在する工場の動力の電化が行なわれ、伝統産業の近代化を推進させると同時に、東山山麓の歴史的景観が工場公害によって荒廃するのを阻止することにも成功した。明治二十八年（一八九五）、この電力を利用してわが国最初の市街電車を走らせ、平安食都千百

年記念大祭と第四回内国勸業博覧会を開催し、全国に復興した新生京都の心意気を示した。さらに明治・大正を通して、第二疏水による水利発電事業、上水道や下水流路の確保、道路拡巾・市電敷設による都市交通網の整備、防災計画などの総合計画により近代都市への脱皮が進められた。

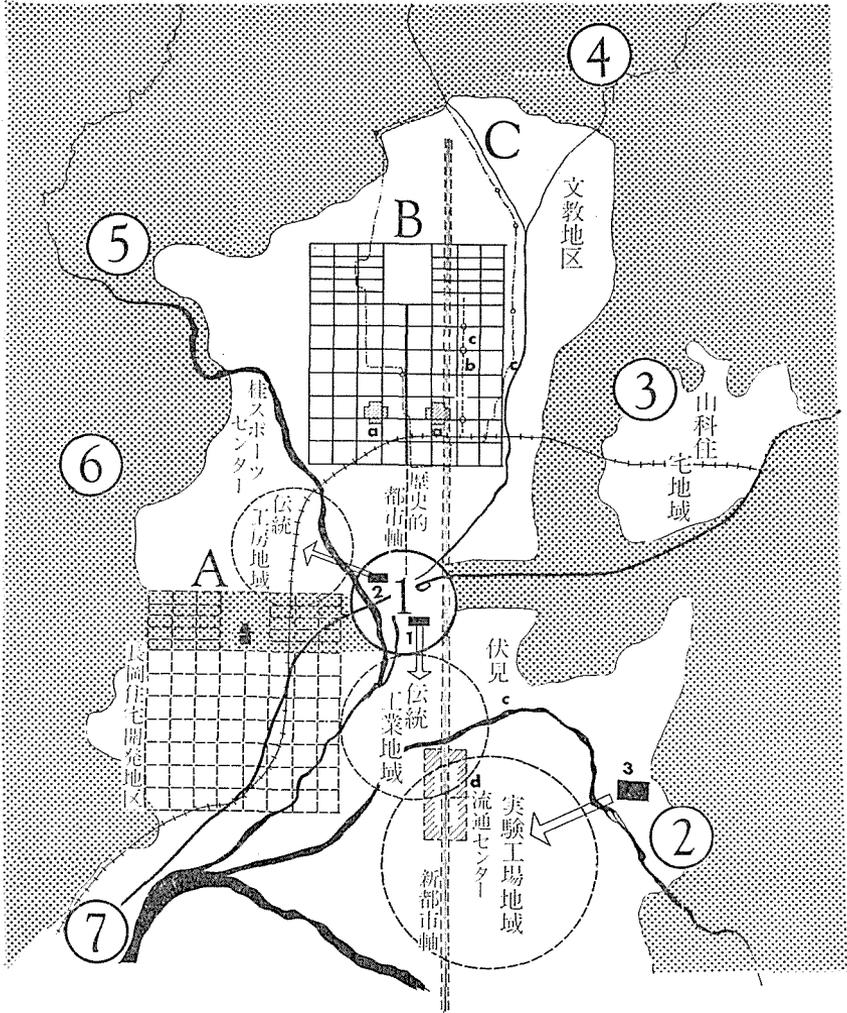
しかしながら、明治初期に進められた新しい産業の積極的導入には必ずしも成功しなかった。それは明治以降、進行した工業化が主として臨海性の工業であり、その発達により阪神地域に工業が集中し、その地理的条件の故に、京都は産業開発・工業化からとり残された形となり、むしろ阪神工業地帯の経済力を背景にして、明治初期の勸業政策のなかにみられた研究・教育・文化的な面での発展の途をたどることになった。このことはまた、京都のもつ文化遺産、歴史的景観を工業化による工場公害の破壊からまもる結果ともなった。以上が京都の都市的発展の概要である。

ところで現在、京都が直面している事態をみると、その一つは京都をめぐる第二の工業化の波ともいうべきもので、それは阪神工業地帯が拡大・膨脹し、内陸にまで滲透しようとするもので、明治初期にはじまる第一の工業化の波に比べてはるかに根底的と予想されるものであり、他は京都に内在する矛盾で、伝統的な歴史的都市であるが故に、その歴史性を再評価しつつ、未来へ発展

すべく、都市の構造の大規模な改造をせまられていることである。

そこで、この新しい事態にいかに対処すべきだろうか。それには京都の都市的発展の歴史、わけても明治以降の独自の近代化の歩みという歴史的经验を生かし、京都がわが国のもっともすぐれた歴史的都市として多数の文化遺産を集積し、かつ文化的學術的中枢として占めてきた位置を充分に考慮すべきである。したがって、その構想は京都盆地の中に限定して計画されるべきでなく、京都が日本の国土全体において占めるべき位置、その独自の特殊性を充分に認識し、計画されるべきである。具体的には明治以降、京都が発展させてきた文化的産業ともいうべき、研究・教育・研修的施設をさらに充実、発展させ、新しい情報文化センターとして、日本全土の中心に位置づけ、また京都がもつ独自の伝統産業、伝統工芸、伝統芸能を現在の時点で明確に再評価して保護育成し、継承発展させ、増大しつつある余暇時間を健全に享受するため、その健康なレクリエーション施設として開発すべきである。かつ、当面する新しい産業開発には、先進的産業の研究的実験的施設を積極的に開発し、その研究的機能を果すべきであろう。

また、ながい歴史的伝統をもつ京都の町も技術の革新、生活様式の変化によって、「古都」として凍結されることをこばみ、新しい時代にふさわしい都市として変容し発展するに相違ない。そ



Ⅲ 環京都緑地帯構想図

A. 推定長岡京跡 B. 古代京都 平安京跡 C. 近世京都 御土居

- a. 古代流通センター 東市 西市
 b. 中世流通センター 町 (三条町・四条町・七条町)
 c. 近世流通センター 高瀬川・室町・烏丸・伏見
 d. 新流通センター 巨椋池埋立地

① 鳥羽口

1. 伝統工業センター

② 宇治口

2. 伝統工芸センター 伝統芸能センター 美術大学・音楽大学

③ 山科口

3. 京大理工学系研究施設

④ 岩倉口

⑤ 嵯峨口

⑥ 長岡口

⑦ 山崎口

ここで、その再開発にあたっては、さきに述べたように、京都のもつ特殊性を認識し、その文化遺産、歴史的景観を再評価し、今日の時点で明確に位置づけ、市民生活のなかに積極的に導入し、定着させるための細かな保存修景計画が必要である。

次に、この観点にたつて、京都の保存修景計画の一案、「環京都緑地帯構想」を提示してみたい。京都は「山河襟帯、自然に城を作す」といわれたが、その文化遺産の多くが、東山・北山・西山の山麓部分に点在していることに注目し、この山麓を緑地帯として整備し、これら文化遺産を自然と歴史的環境のなかに保存し、先にわれわれが提案した長岡宮跡から東へ鳥羽離宮跡、深草から名神高速道路沿いに醍醐に達する洛南緑地帯で東西を結びたい。

これらの緑地帯を設けることによって、京都をめぐる山麓、東山から醍醐、宇治、北山から嵯峨・桂・長岡・山崎に達する環状と長岡・鳥羽・深草の洛南に点在する建築遺構や遺跡などの文化財とその環境を緑地帯のなかに保存し、かつ既成都市域の周縁部に起りつつある無秩序な蚕食的発展を規制することにした。また、この緑地帯のなかの七ヶ所に、近世の「京の七口」の復活ともいふべき関門的施設を設け、通過交通を排除し、乗用車のむやみな市内への乗入れを規制したい。近世の「京の七口」が関門的性格

をもったのに対し、新しい七口は駐車場・宿泊施設・教育啓蒙的文化施設を整備することを特色とする。

そうして、洛南緑地帯の北部は歴史的保存地域とし、文化遺産・歴史的環境を現時点で明確に位置づけ、その保存と保全のための段階的規制を設け、綿密な保存修景計画をすすめることにし、南部は開発地域とし、伝統的・先進的産業の実験的研究的施設の多様な計画的開発をすすめたい。こうして、北部の保存と南部の開発を有機的に結合させ、新しい京都の発展をはかりたい。

洛南緑地帯と南部開発地域

そこで、まず保存と開発の結節帯ともいふべき洛南緑地帯の中央に位置し、最近その保存と開発をめぐって論議されている名神高速道路京都南インターチェンジ附近に焦点をあててみたい。この一帯は鳥羽離宮跡である。平安末期この洛南鳥羽の風光を愛した白河・鳥羽・後白河上皇が仙洞御所として造営した鳥羽殿で院政が行なわれると、「宛ら遷都の如し」（扶桑略記応徳三年）といわれるほどの繁栄を示し、白河上皇の南殿鳥羽上皇の東殿、北殿や田中殿をはじめ、近習の公家の邸宅、地下の雑人の家がたちならんでいたといわれる。また、平安京の造営当時から設けられていた朱雀大路の延長につながる「作り路」が整備され、造庭の工事が進められたという。昭和三十三年（一九五八）、名神高速道路の

計画が発表されると、各宮殿跡の実測調査がなされたが、この工事で東殿・北殿はこの高速道路の道床の下に埋没した。ひきつづき三十五年以降の調査で、田中殿・南殿およびその回遊式の庭園など、数すくない古代の離宮遺跡の構成が明らかになった。^⑧

そこで、かつて「作り路」を通して朱雀大路につながっていたこの鳥羽離宮跡の地点に現在南インターチェンジが設けられ、ふたたび京都の玄関口として復活したことを確認し、歴史的都市京都への玄関、関門にふさわしい施設と環境を造型することにした。すなわち、鳥羽離宮史跡公園を整備し、積極的に活用し、駐車場、モーター、ユースホステルなどの施設を史跡博物館、文化館とあわせて、史跡公園の中に設ける。

新しい「京の七口」ともいうべき関門とここ鳥羽口に設ける諸施設はその規模と構成に変化はあっても、たがいに共通する点が多い。まず、通過交通を禁じ、サービス用車は後述する都市軸を通行させ、ここでは駐車場を設け、また各種の宿泊施設を設けた。修学旅行の学生をはじめ見学旅行者はこの宿泊施設を基地として、現在の短期間にめまぐるしくかけまわる「観光」旅行ではなく、史跡博物館・文化館などで学び、理解を深め、緑地帯に点在する遺構・遺跡を訪ね、その歴史事象と文化遺産のもつ価値を実感をもって追体験するという質的にはるかに高い教育的観光を

享受することになる。したがって、史跡博物館には鳥羽離宮跡の出土遺物、復原模型などを展示し、また一部に平安末期の寝殿造を復原し、史跡公園の維持管理と研究調査にあてることにする。文化館は京都に点在する多数の史跡博物館の中央管理的機能をもち、京都の発展とその国際的文化環境を歴史的に研究把握する研究部門と、一般の見学者が利用し、理解するための施設としての教育部門とに分れる。

また史跡公園の南には伝統工業、北には伝統工芸・伝統芸能の研究・研修センターを設けたい。伝統工業センターは伝統産業の継承と開発のための研究・研修の場とし、南へ拡がる地域に西陣、清水坂などからの集団移転をはかり、従来の伏見の醸造地も含めた伝統工業の管理・研修の中核とする。伝統工芸センターは北に拡がる伝統工芸の工房地帯の中核とし、伝統工芸の継承と開発をめざす研修と管理の施設とし、伝統芸能センターは近接して設ける美術大学・音楽大学と密接に関連させ、伝統的芸能と近代的芸術を交流させつつ、その継承と創造の場としたい。また各センターに接続する工場・工房地帯のなかには貸工場・貸工房・稽古場を設け、レンタル・システムで各種団体に貸しつけ、自ら創造し、創作する場としたい。自ら学習し研修する場としての文化館とともに、余暇時間の増大にともなう観光の質的变化に対応する研修

と創造的活動のためこれらの施設を、真に健康なレクリエーション空間として市民生活のなかに定着させようとするものである。なお、南東部では宇治に整備されつつある京大理工学系研究施設を核とし、その西に拡がる旧巨椋池一帯の実験工場地帯と結び、先進的産業開発とあわせてその工場公害の防止対策も検討する大規模な研究・実験の場とし、全国の工業地帯にたいする研修の中心とした。この実験工業地帯と伝統工業地帯の重なり合う地点に、新しい京都の流通機構を設ける。またここを通り、物資と情報^①の流通・交換を行なう新都市軸によって、北部保存地域と南部開発地域を結び、さらにここから新国土縦貫道路・京奈道路、阪滋道路などで日本全土に連結する。

洛南緑地帯の西に位置する長岡をみると、ここでは一九五四年以来、長岡宮跡の発掘調査をつづけられ、大極殿・小安殿をはじめ朝堂院の構成が明らかにされつつある。ところで、わが国の建築遺跡は発掘調査後、埋戻しがなされる場合が多い。そこでこの地下遺跡の存在を明示するための造園計画を施さなくてはならない。さいわい、この大極殿・小安殿跡は造園計画により史跡公園となった。これをさらに一歩すすめて、広域にわたる朝堂院跡を含む一帯を史跡公園とした。さらに調査を長岡京跡にまで拡大し、その条坊制を復原しつつ、この古代的都城制のパターンを生

かし、坊をもつて近隣住区の単位として活用し、これを四分し、つまり四町ごとに駐車場を設け道路系統を段階的に規制・整備し、老人や幼児も安心して交遊しあえる生活空間として定着させ、長岡京跡と推定される西南部一帯を住居地域として開発したい。

北部保存地域

まず環状緑地帯に設けられた宇治、山科、岩倉、嵯峨、長岡、山崎の新しい七口を鳥羽口と同じ手法で駐車、宿泊などの施設を設けて整備する。また環状緑地帯にかまれた市内では、現在の混乱した道路系統を整理し、人道と車道との調和のある交通空間を創出し、都市的装備として整備したい。

環状緑地帯の内縁部の東部は東山に沿うて学術・文教地区として、さらに充実し整備する。北部は東にある宝池の国際会議場から北山に沿うて上賀茂から御室にかけての歴史的文化環境を保全し、西部の嵯峨・太秦から桂にかけては、京都でももともと古くから開けた地点として文化財が集積し、また王朝時代から隠棲の地、遊宴の地としてたしまれてきたが、今後も市民の行楽地として施設と環境を整備し、西京極から桂にかけて既設のスポーツ施設を充実し、市民の健康なレクリエーション空間として確保したい。こうして東山・北山から西山にいたるならかな山なみの環状緑地帯とその周辺を整備し、かつて和辻哲郎が桂離宮を京都盆地の

風景のなかに把えたように、点在する文化財を自然的環境の保全とかみ合せて保存したい。

ところで、北部保存地域で問題になるのは市街地の再開発と文化財の保存である。京都の市街地には多数のすぐれた建築遺構が存在し、古い町なみ・町家のたたずまいも人々の心をひくし、地下にはまた都市的發展を如実にものがたる都市遺跡が層をなしているはずである。しかし、これらの文化遺産を含む都市を完全に凍結して保存することは不可能である。それは生活体としての都市を固定することはできないからである。このことは平安京創設以来、変りゆく時代に適応してその都市の構造を改造し変容をつづけ、移りゆく生活様式に対応した居住方式を生みだしてきた千年にわたる京都の歴史がなによりも雄弁にものがたっている。いわば京都の歴史は、都市的伝統を更新し発展しつづけてきた再開発の歴史ともいえる。そして京都は、いまかつてない規模と深刻さをもって、その改造をせまられているのである。

ところで現在、京都の再開発にあたって、伝統や歴史的遺産がいかに評価され、継承されているであろうか。あらゆる伝統には積極的に肯定し発展すべき面と否定しざるべき面とがあり、建築や都市の伝統もその例外ではない。その一例として都市景観を構成する要素である市街地の建築とその建築群による町なみについ

てみよう。京都の町家は「通り庭式」住居として知られているが、この型式は土地が細分化され、限定された土地に家屋を建築するために生みだされたもので、近世の武士階級がもつ書院造が身分格式的な空間構成を示しているに對し、まったく機能的な空間構成を特色としている。ところで、さらに注目すべきことは、これらの町家が建築群として統一した調和のある町なみを構成していたことである。町衆の伝統をひく町人たちは、町を生活共同体として把え、その均一性を要求し、生活環境の保全と町なみの不均衡の破壊を町規などで規制した⁵⁰。この整齊な町なみは、町人とその独自の住居型式である町家を生みだした町大工とが協力して都市の造型にもすぐれた配慮を示した結果といえよう。また、この反面、表通りと路次でつながる路地うらに裏借家が多くあらわれてくる。借家は中世にその源流をたどれるが、近世になると住居が商品としてあらわれ、借家経営がなりたってくる。表通に面した借家は「通り庭」型式の町家であるのに対し、この裏借家は連続した一室住居が多く、都市下層住民の住居としてその居住水準もきわめて低かった。

ところで現在進行しつつある再開発をみると、現代の建築技術は都市自体を一つの有機的構造体として構想し、構築することをすら可能にしているにもかかわらず、近世に成立した分割土地利

用の形式にもとづいて細分化された土地に、現在の建築技術を矮小化して適用し、木造建築を鉄骨・鉄筋コンクリートなどにきりかえるのみで、まったく無秩序な混乱した都市空間を構成している。これを都市のたくましい生命力とみることもできようが、そこには近世を通じて培われた調和のある町なみの伝統はまったく失なわれ、また現在の建築技術にふさわしい都市空間も生みだされてはいない。一方、裏借家にみられた低い居住形態と経営方式はむしろ否定すべき面といえようが、今日都市近郊に乱立する民間アパート群はこの悪しき伝統の拡大とはいえないだろうか。

われわれは京都の再開発にあたって、その歴史的経験と遺産を生かし、未来への発展を約束すべく現在の建設技術を駆使し、新しい建築形態と都市空間を創造しなければならない。そしてそれは広域にわたる計画的な再開発によってのみ可能であり、また地下遺跡の調査を含む文化遺産とその環境の保全も、無計画な自律的再開発のもとでは結局破壊をまねがれず、計画的再開発によってはじめて可能なることを認識しなければならない。

この提案では、まず西陣・清水坂などの伝統産業と中央卸売市場の移転による地区の再開発からすすめることにする。その一例として西陣を含む地区の再開発では、千本丸太町近辺と推定され

る平安宮朝堂院跡の発掘調査も具体的な日程に上ってくるだろう。発掘によって明らかになった朝堂院跡は公園化して保存し、その一部を復原建築し、歴史博物館と歴史研究所を設置したい。歴史博物館は京都の都市的發展を示す資料を展示・管理し、また市中に散在する古文書・古記録などを集中管理する文書館の機能も果たすことにする。歴史研究所は研究と併行して再開発にともなう一切の調査の運営と管理にあたる体制を確立し、かつて阪急電鉄の河原町までの地下鉄延長工事にあたって、いわば平安京の東西にわたる試掘坑の設置ともいべき事態に際して、ほとんどなんの学術的知見も成果もうることなく終ったという苦い経験をくり返さぬようにしたい。なお、この朝堂院史跡公園の南につながる平安京の中央軸、朱雀大路を調査して復原し、新都市軸が機械的組織によって整備されるのに対し、人間的な空間としていっさいの機械車輛に煩わされることなく、交流しあえる広大な「みちひろば」として整備したい。京都の市民は誰も夏ごとにめぐりくる祇園祭に、山鉦の列にたいする愛着を覚えるが、また、いっさいの車が運行を停止し、人間がはばかりことなく往来し、つどところとなった都大路を発見し、ようやく人間のものになった路をそこに見出し、大きな感動を覚えるに相違ない。この感動を歴史的都市軸である「みちひろば」に定着させたい。

また市内に点在する文化遺産も、再開発にあたってその価値を再評価し、その環境をも含めて公園的施設として地域社会に定着させ、市民が自由に交流しあう都市、地域社会の機能的な生活の核として整備し、わが国の都市には少ない都市公園緑地を確保することにしたい。このことは、いままで各戸に分断されていた庭のある地域では集中・統合して都市公園とすることであり、またわれわれ日本人が桂離宮をはじめ町家の坪庭にいたるまで、自然を愛しその融合と調和をはかり、すぐれた空間の構成に示してきた建築造型の努力と感覚を、都市的規模にまで拡大させることでもある。そのために都市と自然・歴史的景観の調和と融合をめざし、そのなかに文化遺産を保存しようとする細密な保存修景計画の手法が検討されなくてはならない。

歴史的都市京都にこそ、こうした計画がもっとも強く要請されもし、またそれを推し進めていく条件もあるといえよう。

三、保存修景計画の現代的意義

保存修景計画は文化遺産とそれをめぐる歴史的景観を現時点で明確に再評価し、都市や地域社会に定着させ整備することによって、人々が文化遺産とその環境がもつ歴史的対象と文化財そのもののもつ価値を実感をもって追体験する場を用意することにな

る。ところで、この計画がとくに現在もつ意義について考えてみたい。

第一に、伝統や文化遺産を再評価し、時間をこえて、実感をもって感得することにより、生産の発展と生活環境の向上に努めてきた先人の人間的努力にたいする敬意と人類が培ってきた叡知から多くの教訓を学びとることができる。そうして、人類がもつ共通遺産としての意義を認識し、文化財に接する真剣な態度を確立することができよう。

第二に、この計画は計画過程で、その地方の歴史的研究・調査と密接に結びつき、その成果によって支えられ、かつその成果を十分に生かそうとするもので、国土全体や世界全域におけるその風土と歴史的条件がもつ特殊性を強調するものである。しかし、またその地方の独自の特殊性をもつ文化遺産は、それが人間的努力と人間的願望を鮮明に示すかぎり、地方や民族の相違をこえて、はるかに広い人類の文化遺産としてひとしく共感されるにちがいない。この計画はその地方の歴史的特殊性を強調し、かつ人間的共感をうるための交流を促進させるものでもある。

第三に、前項とも関連するが、科学技術の進歩が民族や国家間の差や特殊性をますますすくし、世界共有・共通の文化としてその普遍性が増大していることは否定できない。人間の生活空間

を設計する都市計画・地域計画にも世界に共通する普遍的な面が強くなるであろうが、保存修景計画は、その地方のもつ個有な歴史的風土的特殊性を強調し、地方の個性を失なわず、人間が住み、かつ訪れるに価する生活空間を設定することにも役立つであろう。

第四に、その地方の住民や民族にとって、独自の地方文化・民族文化を継承し発展させ、創造するための一つの重要な契機となり、力強い刺戟となるであろう。このことは、たとえばカンボジアがその国旗にアンコール・ワットの遺構を記念していることでも明らかのように、とりわけ過去の栄光にひきかえ、現在の低迷に苦悩しつつも、新しい未来をぎりひらき、独自の文化を創造しようとする発展しつつある諸国の住民に力強い激励となることであろう。

第五に、現在進行しつつある第二の産業革命ともいわれる技術革新とコミュニケーションの発達は人類のもつ生活空間を飛躍的に拡大させ、またその生活時間の構成を大きく変化させるに相違ない。この著しい余暇時間の増大はその利用の如何によって人類に限りない孤独と疏外、墮落をもたらし、ことも憂慮されるし、また正しく利用することによって、かつてない規模で全人類の基盤にたつ交流と交遊をうながし、人間に自ら積極的に創造するよう

こびとそこに生きがいを感じさせるゆたかな生活をもたらしことも予想できる。そこで、われわれは人類のゆたかな未来を創造し享受するために、第四次産業ともいふべき多様な文化的産業を開発し、余暇時間を正しく利用するための空間をうみださなければならぬ。保存修景計画はこの新しい生活空間を創造するための重要な要素となるであろう。

現在、進歩をつづける科学技術はその適用の如何によって、人間社会に深刻な危機をもたらしつつあり、その反省と批判の上に、多くの努力がつけられている。たとえば、熱核兵器の開発と原子力の平和利用の問題^④、工場公害の対策、カーソン女史の警告する「沈黙の春」に対する反省など、科学技術の進歩にみあう道義を確立し、その強靱な精神によって科学技術を正しく適用し人類の幸福をゆるぎなきものにししようとする努力と対策がすすめられている。保存修景計画もまた、これらと共通した願望の上にたつて、歴史的文化遺産を無計画な開発による破壊からまもり、これを積極的に未来の生活空間に生かそうとするものであり、文化遺産をそこなうことなく、継承し発展させて、次代にゆずりわたすことは現代に生きるものの責務であると考え、ここにその必要を強調するわけである。

終りに、この保存修景計画を史学研究者の方がたの批判・鞭撻と協力によってはるかに充実したものに向上させ、歴史的文化遺産がひらけゆく未来にゆるぎなき位置を占め、正しく機能するところを念ずるものでもある。

① 「この問題について、すでに数多くの見解の表明と論議がなされたが、その一例をあげよう。

樋口隆康「建設が破壊する？—遺跡保存と国土開発の共存を—」『朝日ジャーナル』五一二五・一九六三

② 赤松俊秀「古文書散逸の危機」『朝日新聞』一九六六・五・二六

③ Lassen, C. Zur Geschichte der griechischen und indo-skythischen Könige in Baktrien, Kabul und Indien. 1838 Bonn Cunnigham, A. The Ancient Geography of India. 1924. Calcutta

Simpson, W. On the Identification of Nagarahara, with reference to the Travels of Hiouen-Thsang. JRAS, N. S. vol. 13. 1881. London

④ Nangarhara Irrigation Project. Survey of Progress 1962-64 Kabul

⑤ Maason, C. Memoir on the topes and sepulchral monuments of Afghanistan. Ariana Antiqua 1841. London

⑥ 雑駁

⑦ Barthoux, J. Les Fouilles de Hadda. Figures et figurines, M. D. A. F. A. Tome IV, 1930. Paris

Barthoux, J. Les Fouilles de Hadda. Stupas et Sites, M. D. A. F. A. Tome V. 1933. Paris

⑧ 調査報告書『ゾールヌムとフィールハナ』近刊予定

⑨ 前掲

⑩ Barger, E. and Wright, P. Excavation in Swat and explorations in the Oxus Territories of Afghanistan. MASI No. 64 1941. London

⑪ Foucher, A. L'art gréco-bouddhique du Gandhara, Tome 1. 1905 Paris

⑫ 邦人の論考にかぎれば

小野文妙『健駄羅の仏教美術』一九二三、東京

榎一雄『キターラ王朝の年代について』『東洋学報』四一—三、一九五八

山田明爾『ニコララの破仏とその周辺』『仏教史学』一一—二、一九六三

⑬ Marshall, J. Taxila. vol. I. 1951. Cambridge

⑭ Burgess, J. Buddhist Art in India 1901. London (translated from Grünwedel, A. Buddhistische Kunst in Indien. 1893)

水野清一「ハッタ発掘の一カ月」『朝日新聞』一九六六・一・二〇
藤田国雄「ハッタの発掘」『芸術新潮』一九六六・五

とくにハッタ地方の遺跡の保存について、水野教授より調査団としての要望書がアガニスタン当局に提出された。またイタリア調査団 G・トマッチ教授からも同様の建議がなされたとき。最近の報道ではかなり強力な保存措置がカーブル博物館によりとられたという。

(Kabul Times, May 8, 1966)

⑮ Lézine, A. Trois Stupa de la Région de Caboul. Artibus Asiae vol. 27-1-2. 1964. Ascona

⑯ 京大西山研究室「京都計画」『新建築』三九一—四、一九六四
沖種郎「京都計画抄論」『SD』六、一九六五

なお、京都市より長期開発構想が発表され、目下審議会で検討中と
さく。

- ⑬ 斎藤忠「羅城考」『史蹟名勝天然記念物』一八一七、一九四三
- ⑭ 赤松俊秀「町座の成立に就いて」、『日本歴史』三三、一九四九
- ⑮ 林屋辰三郎「町衆の成立」『思想』三二二、一九五〇
- ⑯ 西川「環濠城築都市」『日本建築学会論文報告集』二〇三、一九六四
- ⑰ 秋山国三『公同沿革史』上、一九四四、京都
- ⑱ 西田直二郎「御土居」『京都府史蹟調査報告』第二冊一九二〇
- ⑲ 寺尾宏二『明治初期京都経済史』一九四三、京都
- ⑳ 牧野信之助「琵琶湖開墾問題について」『歴史と地理』一六一二・三および前掲㉔
- ㉑ 田辺朝郎『琵琶湖疏水誌』一九二〇、京都
- ㉒ 田辺朝郎・高木文平「水力配置方法報告書」(『琵琶湖疏水及水力使用事業』、一九四〇、京都)
- ㉓ 『京都市営電気事業沿革誌』一九三三、京都
- ㉔ 末尾至行「共武政表の水車統計とその吟味」『人文地理』一四一五
- ㉕ 中村一「緑地問題」(藤岡謙二郎編『現代都市の諸問題』一九六六京都)
- ㉖ 福山敏男・西川・野口「長岡宮跡の調査と保存計画」『国際建築』三二一六、一九六五
- ㉗ 「鳥羽遺跡の調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』一九五九 京都
- ㉘ 「鳥羽離宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』一九六四・一九六六・一九六八 京都
- ㉙ 杉山信三『院の御所と御堂』一九六二、奈良
- ㉚ 福山敏男「長岡京と宮城の遺跡」『仏教芸術』五一、一九六三
- ㉛ 福山・西川「長岡京の大極殿」『日本建築論文報告集』六九、一九六一
- ㉜ 「長岡宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』一九六五・一

一九六六、京都

⑳ 前掲㉔

㉑ 吉田敬市「山城乙訓郡の条里」『紀元二千六百年記念史学論文集』一九四一、京都

福山敏男「長岡京の条坊」『建築史』四一、一九四二

中山修一「古代帝都の自然環境と長岡京について」『人文地理』一一一五、一九五九

㉒ 前掲㉔

㉓ 西川「都市における分割土地利用と建築形態」(藤岡謙二郎編『現代都市の諸問題』一九六六、京都)

㉔ 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一編著『平和時代を創造するために』一九六三、東京

㉕ 庄司光・宮本憲一、『恐るべき公害』一九六四、東京

伊東光晴ほか『住みよい日本』一九六四、東京

K・W・カッパ 篠原泰三訳『私的企業と社会的費用』一九五九、東京

R・L・カーソン 青樹榮一訳『生と死の妙薬』一九六四、東京

なお、事例的考察は水野清一教授を隊長とする京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査と福山敏男教授を調査主任とする長岡宮跡発掘調査に参加した際に考えたもので、両先生、樋口隆康先生をはじめ隊員、調査員の方たちの批判と激励をえた。保存修景計画について、日本建築学会近畿支部に設けられた開発と文化財保存特別委員会でも検討がつづけられていることを附記する。

(京都大学助教)

The Commons in the Lancastrian Parliament and their Development

by

Hisao Ono

In Comparison with Yorkist and Tudor Commons, the Lancastrian ones have been heretofore too highly estimated in their constitutional history. The estimate depends on the fact that the Lancastrian governments were influenced by a few powerful nobles, and there is new opinion asserting that the Lancastrian period had given birth to the gentry that forming the majority of the parliamentary members during the days of Tudor absolutism, played the important part in English parliamentary development from medieval ages to the nineteenth century. Of the political and social relationship between the nobles and gentry members, however, any consideration is not given.

Aiming to investigate the character of the Commons in the Lancastrians, the author of this paper examined the following problems:

- 1) the political actions between the great nobles and the Commons,
- 2) the changing character of the social compositions in the parliamentary members—country gentlemen's invasion to the borough's constituencies,
- 3) the social compositions in the parliamentary members—the compositions becoming more homogeneous.

Planning of Preservation and Rehabilitation

—A project to preserve the historical and cultural heritage—

by

Kôji Nishikawa

In accordance with the renovation of scientific technique and economic development, the human environment of living is destined for its constitutional reconstruction with the very scale and seriousness that have never been experienced. This caused the confrontation between preservation and exploitation for the historical and cultural heritage which are sometimes considered as a contradictory idea, though both ideas

should be organically treated and settled under the common purpose of productive development and circumstantial progress which the human history has stood for.

This article, from this point of view, is to emphasize the necessity of Preservation and Rehabilitation Planning to reevaluate the cultureal heritage at present and to introduce positively and settle as a regional and urban cultural heritage into human living space. As case studies of this Planning, Nagarahara Preservation Project and Circular Kyoto Green Belt Project are explained. In conclusion, I emphasize the present importance of Preservation and Rehabilitation Planning, hoping the human cultural heritage should be succeeded and developed and take proper part and function in the progressive future.